

* 東郷雄二 最終講義

言葉とココロ
言語の目に見えない面について
の2・3のこと

*研究の出発点

- (1) プラーク学派の機能的構文論
(Functional sentence perspective)
- (2) D. L. Bolinger, *Linear modification*, 1952
- (3) 久野暁 『日本文法研究』, 1973
- (4) C. N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 1976
- (5) 安井稔 『新しい聞き手の文法』, 1978
➡文を構成する単語の語順とコミュニケーションの関係を律する原理を探る

*キー概念

主題 (topic)、新情報 / 旧情報、前提 / 焦点
《語順に関して有標な構文》

- (1) 倒置構文 Up jumped the rabbit.
- (2) 非人称構文 There arrived two policemen.
- (3) 分裂文 It's Peter who broke the window.
- (4) 主題化構文 Chocolate, I don't like.
- (5) 左方転位構文
The answer, you'll never know it.

*もうひとつの関心事

フランス語学の難問のひとつ

1) C'est un Français.

(=This is a Frenchman.)

2) Il est français. (=He is a Frenchman.)

コピュラ文では主語に指示代名詞ceを使うことも
人称代名詞 il / elle を使うこともあるが、使い分け
の原理がよくわかっていない。

《先行研究》

R. Declerck, “'It is Mr. Y' or 'He is Mr.Y'?”

Lingua 59, 1983

*コピュラ文 〈A is B〉 の分類

(1) 措定文 (predicational sentence)

指示的名詞句Aについて非指示的名詞句Bで属性を述べる。

ex. My brother is a pianist.

指示的

非指示的

英語ではheを、フランス語ではilを用いる。

My brother? *He* is a pianist.

Mon frère ? // est pianiste.

*コピュラ文 〈A is B〉 の分類

(2) 指定文 (specificational sentence)

非指示的名詞句Aについて指示的名詞句Bでその外延を指定する。

ex. My best friend is Peter.

非指示的

指示的

英語ではitを、フランス語ではceを用いる。

My best friend ? *It* is Peter.

Mon meilleur ami ? C'est Pierre.

*コピュラ文 〈A is B〉 の分類

(3) 同定文 (identificational sentence)

指示的に用いられているが、その正体が不明な名詞句Aについて、非指示的名詞句Bでその正体を記述する。正体とは、人では氏名・血縁関係など、物ではそのカテゴリーである。

Peter ? Who is Peter ? — *He* is my classmate.

What is this flower ? — *It's* a kind of rose.

同定文 (続き)

英語では人にはheを、物にはitを用いるが、フランス語では人にも物にもceを用いる。

Pierre ? Qui est Pierre ? — *C'est* un camarade de classe.

Quelle est cette fleur ? — *C'est* une espèce de rose.

*新しい研究テーマ

名詞句の指示と照応 (reference & anaphora)

しかし問題が…

指示の問題は言語学ではなく、分析哲学で盛んに研究されて来た問題。

➡それから10年ほど分析哲学にどっぷり漬かる

飯田隆『言語哲学大全』全4巻

野本和幸『意味と世界 - 言語哲学論考』

S. Kripke, *Naming and Necessity*

D. Kaplan, "Demonstratives", *etc.*

*分析哲学を勉強して気づいたこと

分析哲学の多くが採用する真理条件意味論では文の意味とは外延であり、外延は真偽値だとされる。真偽値を定めるために真理条件を用いるが、それはおおむね次のようである。

1) 太郎は花子を愛している。

この文は、考慮される談話領域 (universe of discourse)に「太郎」と「花子」という名を持つ人物が含まれていて、かつ太郎が花子を愛している場合に限り真である。

*言語学から見た真理条件意味論の問題点(1)

真理条件意味論は命題の真偽を問題とするが、言語学から見れば文が真か偽かはどうでもよい。言語学の意味論の課題は次の点を明らかにすることにある。

(A) 聞き手は文中のいかなる手がかりをもとにしてある意味解釈に到達するのか？

(B) 聞き手は文の中にない手がかりをもとにして意味解釈を行うが、その機序はいかに？

*言語学から見た真理条件意味論の問題点(2)

次のa)とb)の真理条件は同じだが、日常の挨拶としてはb)はおかしい。

a) 今日はいい天気ですね。

b) 今日はいい天気です。

終助詞「ね」の意味は真理条件には関係しない。言語学では真理条件に関係しない言語要素の働きを問題にする。

*言語学から見た真理条件意味論の問題点(3)

真理条件意味論は聞き手を考慮しない。しかし話し手が聞き手に何かを言うのは、多くの場合、聞き手に何かを伝えるためである。文の意味が聞き手に正しく解釈されることによって、聞き手が保持する「世界の表示 (representation of the world)」が更新されるという面を考慮し、そのモデルを考えなくてはならない。

*言語学から見た真理条件意味論の問題点(4)

文の意味解釈において、聞き手は文の意味 (what was said)以外の談話資源を利用する。言語学の意味論はそのメカニズムを解明しなくてはならない。

The professor was drunk. (Russell)

この文は考慮される談話領域に酔っている教授がただ一人いるときに限り真であるが、その談話領域はどうやって得られるのか。

*命題の外延を真偽値としない立場

「私の提案は、文の価値を真理条件ではなく、文脈を更新する力 (context change potentials) とするということである。こうすると文を構成する要素の価値は、それらがどのように文脈を更新する力として働くかに応じて評価されることになる。」

G. Chierchia, *Dynamics of Meaning*, 1995

*文脈(context)とは何か

「前提(presupposition)とは会話の背景として話し手が真だと思っている命題の集合である。前提は会話の参加者の共通基盤(common ground)とされるものであり共有知識である。(…)より根源的に考えると、話し手の前提は命題の集合よりも、可能世界の集合と捉える方がよい。会話の参加者はそれぞれ自分の可能世界の集合を保持していて、それを文脈集合(context set)と呼ぶ。」

R. C. Stalnaker, "Assertion"

*断定(assertion)とは何か

「断定はどのようにして文脈を更新するのだろうか。何かを断定するということは、文脈集合をあるやり方で狭めることである。すなわち断定されたことと両立しない可能世界を排除することである。別な言い方をすると、断定するとは、聞き手が持つ前提に何かを付け加えることで、その前提を更新することである。」

R. C. Stalnaker, “Assertion”

*文脈を更新する力のまとめ

「太郎は風邪で休みだ」と述べることは、聞き手の文脈集合 (=前提集合) に含まれている「太郎」について、文脈集合に含まれていない「風邪で休みだ」という情報を付け加えて、聞き手の文脈集合を更新することである。

*心的モデル (mental model)の必要性

文脈が会話の参加者が持つ前提集合であり、断定すること（=新たに何かを述べること）が前提集合の更新であるとする、会話の参加者が持つ前提集合と、それが刻々と更新されてゆく過程を表示するモデルが必要である。前提集合は会話の参加者の心(mind)の中にある。ならば必要なのは前提を管理する心的モデル (mental model)である。

*談話モデル理論 (Discourse Model Theory)

談話モデルとは、以下の3つの領域から成る心的モデルであり、一種のファイルシステムである。

(A) 共有知識領域 Shared Knowledge

世界について持っている知識を格納

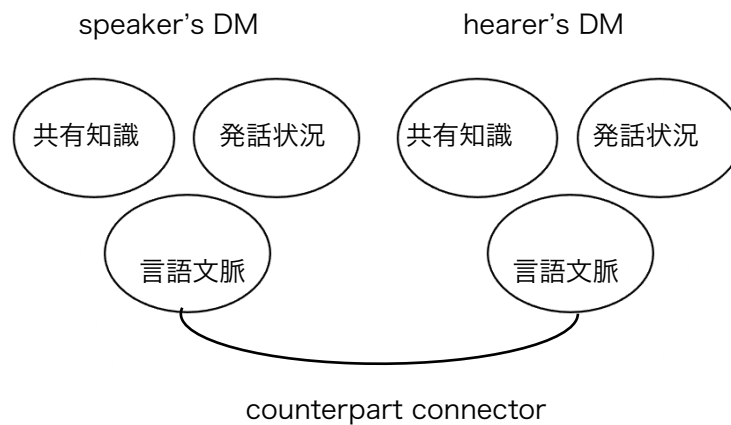
(B) 発話状況領域 Context of Use

話し手と聞き手を含む発話の場

(C) 言語文脈領域 Linguistic Context

発話によって述べられた情報を格納

*談話モデル理論の表示



*定冠詞 the の意味

the Nは存在前提を伝達する。

(A) 存在領域が共有知識領域

The sun rises in the east.

The president will resign soon.

(B) 存在領域が発話状況領域

Mind the step.

(C) 存在領域が言語文脈領域

I met a boy yesterday. The boy was...

*日本語の指示詞コ・ソ・ア

(A) 現場指示用法

この本…/ その本… / あの本…

(B) 文脈指示用法

駅前にタクシーが停まっていたので、そのタクシーに乗った。

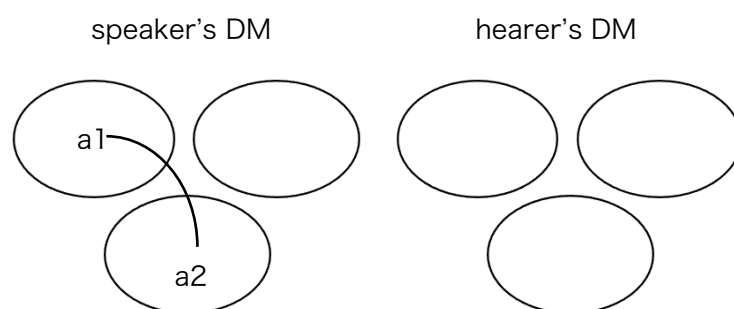
議長の任期はこれを2年とする。

(C) 観念指示用法（記憶指示）

ほら、先月沖縄料理店に行ったでしょ。あの店、とてもおいしかったですね。

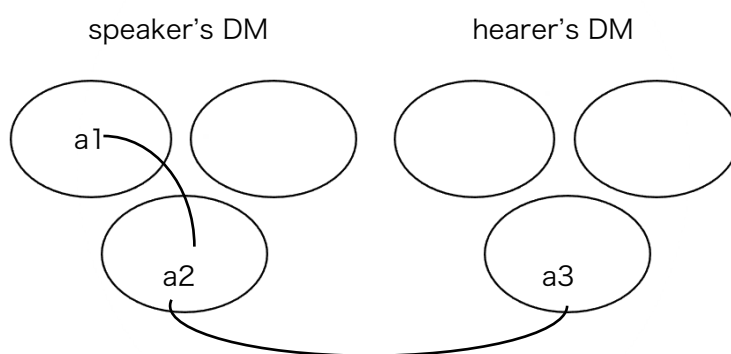
*指示詞アの観念指示の談話モデル図

あのナポレオンもロシアの冬の寒さには勝てなかった。



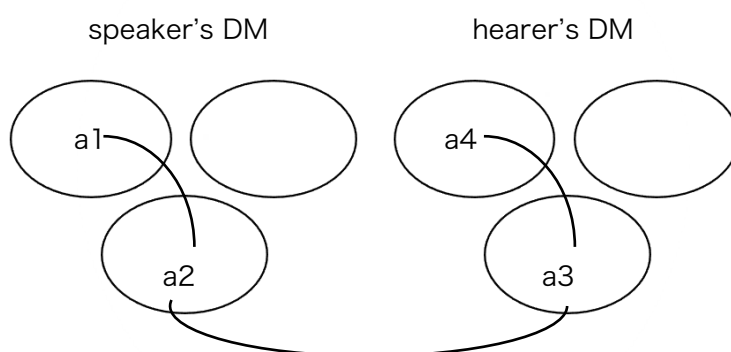
*指示詞アの観念指示の談話モデル図

あのナポレオンもロシアの冬の寒さには勝てなかった。



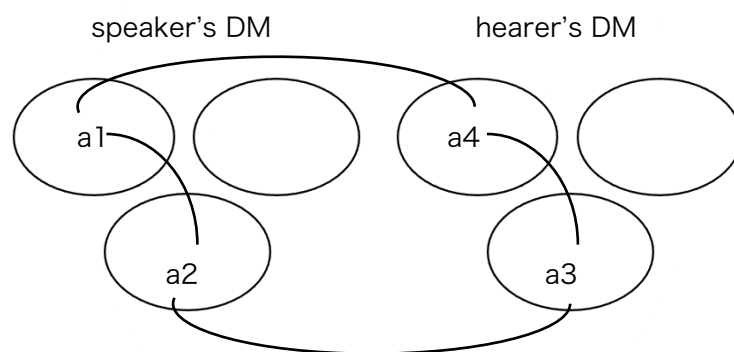
*指示詞アの観念指示の談話モデル図

あのナポレオンもロシアの冬の寒さには勝てなかった。



*指示詞アの観念指示の談話モデル図

あのナポレオンもロシアの冬の寒さには勝てなかった。



*文脈指示のコとソ

- a) もし駅に急行が停まっていたら、{その / *この} 急行に乗ってください。
- b) 昨夜、京都市左京区で民家が焼ける火事がありました。{この / ??その} 火事で二人が軽い火傷を負いました。

*文脈指示のコとソの使い分けの原則

指示詞を含むホスト文の内容が、話し手が専有する情報であったり、話し手が自分により近い情報であるとみなすとき、コを用いる。

ホスト文の内容が、話し手が専有する情報ではないとき、または話し手と聞き手の両方から心理的に等距離にあるとき、ソを用いる。

- a) 「A社が倒産しました」 「それは大変だ」
- b) 「A社が倒産しました」 「これは大変だ」

*文脈指示のコとソ(原則の確認)

- a) もし駅に急行が停まっていたら、{その / *この} 急行に乗ってください。

→ 「急行」は仮定文の中にあり、話し手と聞き手から等距離にある。

- b) 昨夜、京都市左京区で民家が焼ける火事がありました。{この / ??その} 火事で二人が軽い火傷を負いました。

→ 話し手であるアナウンサーは文の内容を専有している。

*従来の用法に還元できないソの用法

- a) 子育ての秘訣はその子の個性を伸ばすことだ。
- b) 餡の塩加減はその日の気温で変えています。
- c) その時、歴史は動いた。
- d) その店の味噌汁の味が忘れられない、そんな店が誰にもあるでしょう。
 - 現場指示用法ではない。
 - 先行詞がないので文脈指示用法でもない。
 - 観念指示用法でもない
(観念指示用法はアに限られる)

*従来の用法に還元できないソの用法 (続き)

解決する鍵は隠れた量化 (covert quantification)にある。

子育ての秘訣はその子の個性を伸ばすことだ。

- ・ 状況1 { ... 子供1 ... }
 - ・ 状況2 { ... 子供2 ... }
 - ・ 状況3 { ... 子供3 ... }
- } 全称量化

*従来の用法に還元できないソの用法 (続き)

子育ての秘訣は(親が)その子の個性を伸ばすことだ。

$\forall s \forall x [\text{親}(x, s) \rightarrow \text{個性を伸ばす}(x, f(s), s)]$

- ・ x は親を変域とする変数
- ・ s は状況を変域とする変数
- ・ $f(s)$ は状況を変域とし子供を値域とする関数

上の論理式を読み下すと、

「子供 $f(s)$ を含むすべての状況 s において、親 x は子供 $f(s)$ の個性を伸ばす」

*従来の用法に還元できないソの用法 (続き)

子育ての秘訣はその子の個性を伸ばすことだ。

【結 論】

この用法の「その」は「関数解釈」もしくは「関数用法」と呼ぶのがよい。上の例で「その」が表す関数を $f(x)=y$ とすると、 $f(x)$ は子育てする状況 x を変域とし、その状況に含まれる子供 y を値域とする関数である。「その子」は関数 $f(x)$ によって与えられた子供を指す。

*従来の用法に還元できないソの用法 (続き)

b) 餡の塩加減はその日の気温で変えています。

$f(x)=y$ x : 餡作りする状況、 y =餡作りする日

c) その時、歴史は動いた。

$f(x)=y$ x : 重大事件が起きる状況、

y =重大事件が起きた時間

d) その店の味噌汁の味が忘れられない、そんな店が誰にもあるでしょう。

$f(x)=y$ x : 外食する状況、 y : 入った店

*従来の用法に還元できないソの用法 (続き)

「その」の関数用法が慣用句となった例

a) その日暮らし

b) その場しのぎ

c) その場かぎり

d) その日送り

e) その日稼ぎ

*不思議なソの用法 (宿題)

女性誌Frau 2008年7月号 結婚特集記事

「その彼は、その人？」

【解釈】

あなたが今付き合っている彼 / 今あなたのそばにいる彼は、ほんとうにあなたの理想の結婚相手ですか？

*フランス語の半過去の不思議な用法

a) C'était la deuxième fois qu'elle {venait /*est venue} à Vienne.

彼女がウィーンに来るのはこれが2度目だった。

b) J'ai rencontré un réfugié qui arrivait de Kosovo.

私はコソボから来た難民に出会った。

→ 「属性付与の半過去」 (春木仁孝)

c) Il y a 100ans naissait Frantz Kafka.

今から100年前にフランツ・カフカが生まれました。

d) Le train siffla longuement. On arrivait à la gare.

列車は長く警笛を鳴らした。駅に着いたのだ。

*半過去の用法と類似する現象 (1)

英語の進行形の「行為解説用法」

a) When I talked to you, I was not blaming you in any way.

あなたとお話ししたとき、私はあなたを非難したのではありません。

通常の進行形と異なり状態動詞も使える。

b) We are not hating him.

私たちは彼を嫌っているわけではありません。

*半過去の用法と類似する現象 (2)

ロシア語の不完了体の「単事実言及用法」(三谷恵子)

a) Zimnij dvorec stroil [imp.] Rastrelli.

冬の 宮殿ACC 建てた ラストレルリNOM

冬の宮殿を建てたのはラストレルリだ。

b) 「知らせがある。ジェスチャンシチクが戻った」

「確認しようか。」私はヴィーチカにたずねた。

「もう確認した[imp.]。」サーシカが言った。

c) 部屋に入って彼は同僚に言った。「なんてここは蒸し暑いんだ。せめて窓を開けておいてほしかったね。」

「でも俺はさっき開けた[imp.] んだよ。」

*フランス語の半過去の不思議な用法 (続き)

「半過去が用いられている発話は基本的には属性付与機能を担っている」(春木 2000)

「時間的前後関係を含む事態の成立・不成立に関する情報は二次的なものとして背景に押しやられている」(Ibid.)

「複合過去が事態が成立した(している)かしなかった(していない)かを問題にするのにたいして、半過去は事態の成立・不成立を問題にしない」(前島 1997)

*フランス語の半過去の不思議な用法 (続き)

半過去のこの用法に共通しているのは、何らかの事態を新たに断定するのではなく、

- 1) 事態が前提に含まれている → 強調構文
- 2) 再確認する → Il y a 100 ans naissait...
- 3) 別の事態の背景説明として提示される

→ On arrivait à la gare.

ということである。ここから何かを導くことができないか。

*フランス語の半過去の不思議な用法 (続き)

a) [午前中に大雨が降った夜の会合で会った人に]

Qu'est-ce qu'il {a plu / *pleuvait}, n'est-ce pas ? ひどい雨でしたね。

b) [午前中に大雨が降った時いっしょに雨宿りした人に、夜の会合でまた出会う]

Qu'est-ce qu'il pleuvait, n'est-ce pas ?

ひどい雨でしたね。

→ 半過去は話し手と聞き手の間で、過去の事態に関する情報の共有を必要とする

Tasmowski-De-Ryck & Vetters (1996)

*フランス語の半過去の不思議な用法 (続き)

【仮説】 この半過去の用法は、事態を新たに断定するのではなく、当該の事態が話し手と聞き手の間で共有されているか、共有されていると見なすことを求める談話管理の用法である。

a) C'était la deuxième fois qu'elle venait à Vienne.

彼女がウィーンに来るのは2回目だった。

→ 「彼女がウィーンに来ている」ことは前提でありすでに共有されている。

*フランス語の半過去の不思議な用法 (続き)

b) J'ai rencontré un réfugié qui arrivait de Kosovo.

私はコソボから来た難民に出会った。

→ 制限的關係節の内容は前提を表す。

c) Il y a 100ans naissait Frantz Kafka.

今から100年前にフランツ・カフカが生まれました。

→カフカが100年前に生まれたことは既知の事実。

d) Le train siffla longuement. On arrivait à la gare.

列車は長く警笛を鳴らした。駅に着いたのだ。

→背景情報として共有することを聞き手に求める。

*これで最終講義を終わります。ご静聴ありがとうございました！